

はじめに 国際スタンダード

現在、子どもたちは、インターネットを介して、不正確で危険な性情報を得ています。

これに対して、多くの国々では、性教育を義務づけ、子どもたちの発達段階に即して、彼らの性的権利と健康を守れるような情報とスキル、態度などについての学習を保障しています。

懸念払しょく

この動向に拍車をかけたのが、2009年のユネスコ「国際セクシュアリティ教育ガイドンス」です。そこでは、5歳から発達段階ごとに達成されるべき学習目標が設定されたばかりではなく、「寝た子を起こす」というような性教育に対する懸念を払しょくする「包括的性教育プログラム」実施後の子どもの性行動調査の結果も示しています。また、2010年にWHO（世界保健機関）ヨーロッパ地域事務所とドイツ連邦健康啓発センターが発行した「ヨーロッパにおける性教育スタンダード」も、0歳～15歳、15歳以上の子どもの発達段階に即して、学習目標を決め、それぞれの段階での必要事項を「情報の提供」「スキルの修得」「思考や理解の発達」の課題ごとにマトリック

表 ヨーロッパの性教育標準化案
提供すべき情報と修得させたい力

課題	情報の提供	スキルの修得	思考や理解の発達
1	<ul style="list-style-type: none"> ・身体の知識、身体イメージおよび身体の変形(女性器の切除、割礼、処女膜とその修復、拒食症、過食症、ピアシング(ピアス穴を開けること)、タトゥー) ・月経サイクル；二次性徵、男女におけるそれらの機能およびそれにともなう感情 ・メディアにおける美のメッセージ；人生を通じての身体の変化 ・ティーンエージャーがこれらのトピックスに関連した問題で利用できるサービス業務 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の身体についての人々の感情がどのように彼らの健康、自己イメージおよび行動に影響するかを説明する ・春学期と折り合いをつけて受け入れ、ピア・プレッシャー(仲間からの同調圧力)に抵抗する ・メディアのメッセージと美容産業に批判的である 	<ul style="list-style-type: none"> ・身体の変形に関連した批判的思考 ・異なる体形の受容と理解

クスにしてあげ（表）、提供すべき情報と修得させたい力を明らかにしています。

8領域で構成

ユネスコの「ガイドンス」は2018年1月に改訂版が出されました。そこで示された包括的性教育の枠組みは「①関係性 ②価値・権利・文化・セクシュア

リティ ③ジエンダーの理解 ④暴力と安全の保持 ⑤健康と幸福のためのスキル ⑥人間のからだと発達 ⑦セクシュアリティと性の行動 ⑧性と生殖の健康」の8領域からなる広い射程で構成されています。包括的性教育は何よりも、ジエンダー平等、人間の多様性と相互尊重を前提に構成されていることが特徴です。

また、ヨーロッパ諸国は日本と違つて、性教育は多くの国で必修であり、その内容に最低標準があります。性教育関連事項を扱う教科は生物や科学が多く、その他に健康教育やP.S.H.E（個人的・社会的・健康と経済についての教育）、総合学習があげられます。性教育担当者はこれらの教科担当者と学校医、スクールカウンセラー、学校看護師、ファミリー・プランニングのスタッフなど健康専門職者が担います。多くの国で、学校は性教育関連のNGOと連携しています。

各国を順次紹介

この冊子では、順次、このような特徴のあるヨーロッパからフランス、フィンランド、オランダ、ドイツ、イギリスを教科書も含めて取り上げ、同じく包括的性教育を実施しつつあるアジアからは中国、韓国を取り上げて紹介していきます。（詳しくは『教科書による世界の性教育』「かもがわ出版」参照）



オーストラリアの公立中学校の1年生の性教育の授業。与えられた材料で生殖器を作っているところ。

海外の教科書の多くは、人間の遺伝と生殖、避妊、中絶、生殖補助医療、生命倫理等に関わる最新の知識や技術を扱っているだけではなく、多様な人間存在と人生上で起きる性と生殖に関わる事項への責任ある行動の必要性についても述べています。

さらに、「はどめ規定」をもつ日本の学習指導要領の問題点と教科書についても指摘します。先進的な性教育を開拓していった1990年代の日本の性教育をも振り返りながら、まだまだある学校における性教育実践の可能性についても取り上げます。

〔橋本紀子〕